

ヨハネによる福音書 5:31-47

アドヴェントクランツの2本目のローソクに火が灯されました。ローソクの本一本に火が灯されていくのを見て、私たちは視覚的にも、また一つクリスマスが近づいたことを思うのです。ところで、それを見て皆さんは何を思い起こされたのでしょうか。子どもであれば、イブの夜の出来事を想像し、期待で胸が高鳴ることでしょう。ただ、子どものように心躍ることがなくとも、クリスマスは、私たち大人にとってもやはり楽しく、そして、喜ばしいものでもあるのでしょうか。それは、クリスマスと共に祝うところでは、ここかしこで人の笑顔で一杯になるからです。そして、それがクリスマスというものだ、私たち大人が知っているのは、これまでそうしたたくさんの経験をしてきたからです。そして、私たち大人にそれが許されているのは、かつて子どもであった私たちと、生活と時間を共にする大勢の大人たちがいて、その大人が今の私たちと同じように、クリスマスを喜び、楽しもうとして集うていたからです。だから、その大人たちと過ごす中で、かつての子どもであった私たちは、クリスマスがどういうものなのかを身体的に記憶することになったのです。ですから、そういう意味で、子どもたちに必要なことは、かつての私たちがそうであったように、クリスマスを喜び楽しむ私たち大人と一緒にいることです。そして、このことは、子どもたちにとって、というよりも、むしろ大人である私たちにとって、より大切なことだとも思うのです。なぜなら、クリスマスが本質的にすべての人々にとって喜びの時であるのは、誰かだけが、誰かだけを、というものではないからです。それゆえ、私たち大人にはみんなを笑顔にするという、一つ大事な役割が与えられているのです。隣人も子どもも自分たちも、みんなが笑顔になる、それも、なろうとしてなるのではなく、自ずとそうされていく、私たちが主の教会で祝うクリスマスとは、そのことを私たちに教えてくれているものなのです。

従って、クリスマスという経験は、すべてが同じ姿形をしているわけではありません。子ども時代に別れを告げるその時、それが私たちにとって少し寂しくものあるように、その時々でクリスマスはいろいろな

色彩を帯びることになるからです。けれども、私たちがクリスマスを心から喜び、心から楽しむためには、それもまた必要なことなのです。なぜなら、幼虫がサナギから成虫になるように、私たちが新たにされるということは、一つの終わりを通してのことだからです。私たちが何度も何度も終わりを経験しなければならぬのはそれゆえのことでもあります。ですから、それは、言葉で言うほど簡単なことではありません。ただ寂しいというだけでなく、終わりを迎えるということは、私たちにとっては痛みであり、苦しみでもあるからです。時に絶望の淵に佇むことさえあるのです。けれども、御子の誕生の場面にも描かれているように、この深き淵に立つ経験こそが私たちがクリスマスの本質的な喜びへと導くことになるのです。それは、そこで私たちは神様の愛を経験するからです。だから、それを肌身で知っているイエス様はこの神様の愛を私たちに伝え、経験させようとしているのです。それゆえ、私たちにとってのクリスマスとは、決して子供だましのようなものではありません。

折りが良くても悪くても、クリスマスは私たちにとっての喜びであるのです。それは、私たちが神様に造られた世界に私たちが生きているからです。聖書が神様に造られた人間としての喜びと叡智を私たちに明らかにするのはそのためです。そして、イエス様の母マリアと父ヨセフが知ったことはこのことでもありました。それゆえ、まだ何も訪れてはいないこの時、この何も無いし、何も分からないというところにしっかり立ちたいと思うのです。そして、それは、ただ漠然とということではありません。クリスマスはが希望をもって迎えるものであるように、この希望ゆえに、私たちは御子という神様の叡智を我が身に宿すことにはからず。まただから、御言葉はこの叡智を身につけた者の姿を次の言葉をもって語るのです。そこでその詩篇42編1節から7節までの御言葉をお読みします。

「涸れた谷に鹿が水を求めるように 神よ、わたしの魂はあなたを求める。

神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て 神の御顔を仰ぐことができるのか。昼も夜も、わたしの糧は涙ばか

り。人は絶え間なく言う「お前の神はどこにいる」と。わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす喜び歌い感謝をささげる声の中を祭りに集う人の群れと共に進み神の家に入り、ひれ伏したことを。なぜうなだれるのか、わたしの魂よなぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。」と。

このように、ここに御子の誕生を待ち望む私たちの姿を見ることができのですが、それは同時に、それを大切にしてきたのが神の民イスラエルの姿でもありました。ただ、喉元過ぎれば、ということなのでしょう。この日の御言葉を見ていく限り、本来イスラエルが大切にしてきたものの姿はどこを探しても見当たりません。まただから、イエス様もそんな彼らに向かって、「あなたたちの内には神への愛がないことを私は知っている」とこう仰ったのしょう。そして、彼らのこの神様への愛のない姿を象徴しているのが、彼らの「自分は知っている。分かっている」との思いでありました。それゆえ、イスラエルという神に帰属しているとの奢りが彼らの目を塞ぎ、また、曇らせ、ひいては神の子であるイエス様ご自身をも拒ませることになったのです。イエス様がその彼らに向かって、神の子であるご自身について語るのはそのためでもあります。ただ、イエス様が語れば語るほど、そこで明らかにされたことは、ユダヤの人々とイエス様との間にあるその隔たりの大きさでありました。そして、そこで御言葉が明らかにすることは、その原因のすべてがイエス様ではなく、ユダヤの人々にあるということです。このように彼らの傲慢な姿に、御言葉はすべての理由を見出そうとするのです。それゆえ、アドヴェントを過ごす私たちに求められることは、彼らのようにはならないこと、イエス様を神様の独り子としてしっかりと迎えすること、この二つを守り、彼らの正反対を行くことでもあるのでしょうか。

そこで、ユダヤの人々のことを見て参りますと、彼らが拒絶しているのは、イエス様と神様との関係性のあり方そのものにあることが分かります。つまり、彼らがイエス様を拒むのは単に好き嫌いといった、そういう表層的なものではなく、イエス様を受け入れることが彼らのアイデンティティ、存在意義そのものを脅かすものであったということです。そして、彼らにとってそれは、自分たちがこれまで積み上げ、大切に

してきたものの一切切切を失う、そんな気持ちにさせられるものでもありました。ですから、彼らが既得権にしがみつき、そこから離れることのできない憐れな人々のように見えるのはそのためです。まただから、イエス様もそんな彼らの不遜な態度を言い表そうとして、「ヨハネは、燃えて輝く灯火であった。あなたたちは、しばらくの間その光の下で喜び楽しもうとした」と語るのです。それゆえ、このイエス様の言葉を耳にして、また「なるほど」とも思うのです。なぜなら、イエス様のこの言葉の中に現されているものが、御子の誕生を喜ぶ者とそうでない者との違いでもあるからです。ですから、イエス様が「互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか」とこう仰るのは、まさにその違いを言い表すためでもあったのです。

しかし、この違いの克服はイエス様をしても直ちにできるものではありませんでした。それは、自分は知っているし、分かっている、だから、満たされているとの強固な思いは、積年の結果であり、おいそれとはすぐに消え去るものではないからです。ですから、その彼らの視点に立てば、むしろイエス様の方が傲岸不遜な輩ということになるのですが、もちろん、そうでないことは私たちには分かっています。彼らこそが傲岸不遜な輩であると、御言葉もそう語っているからです。ですから、先ほども申しましたように、彼らのその姿を見て、私たちがどうすべきか、それははっきりしているわけです。それは、イエス様が語る真実、神様がイエス様ご自身について証しされていること、イエス様が彼らのことを「父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである」と仰るようにイエス様を信じること、さらには、「あなたたち内には神への愛がない」とユダヤの人々を指してイエス様がこう仰るように、神様への愛を徹底して貫くこと、彼らのようにならないためには、私たちにはこれらのことを徹底して行う必要があるのです。そして、それが御子をお迎えする上での私たちの態度だとも言えるのですが、ところが、それが分かりながら、それが大切であると分かれば分かるほど、それゆえにまた、分かろうとすればするほど、私たちが不安や恐れに駆られてしまうのはどうしてなのでしょう。けれども、幼い頃の私たちは違いました。

幼い頃、クリスマスはただ嬉しく、ただ喜ばしいものでありました。それは、守られていることを肌身で感じていたからでもあります。しかし、今は違う、私たちがもしそう思うとしたら、それはどうしてなのか、それは、私たちが地にしっかりと立って生きているからでもあります。けれども、だからこそまた思うのです。この守られているとの実感が持てずにいる子どもたちのことを思うと、本当に胸が締め付けられる思いがするのです。けれども、私たちがどう思おうとも、その子の人生を変えることはできません。ガザやマリウポリの子どもたちを何事もなかったように元の状態に戻すことなどできないからです。それだけではありません。幼稚園の子どもたちも教会学校の子どもたちもそうです。その子の人生を、私たちが考えるにふさわしいものに変えることなどできることではない、いや、しては行けないことだとも思うのです。ただ、この「何もできない」という現実が私たちを不安へと駆り立て、苦しめるのです。まただから、私たちは、その解決方法として懸命に聖書を読んだりしたりもするのですが、では、イエス様がユダヤの人々に向かって語る「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している」というこの言葉は、そんな私たちのことを嘲笑ってのことなのでしょうか。もちろん、そうではありません。

「聖書は私について証しをするものだ」とイエス様が仰るように、それは、あくまで彼らのことで、イエス様を信じる私たちのことではないからです。

ですから、私たちと彼らとでは、この点においても明らかに違うのですが、しかし、そうであるにもかかわらず、どうしてなのでしょう。イエス様が思い煩うなど仰っているにも関わらず、私たちは思い煩い、不安を感じてしまう。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われて、なお、目には目を、歯には歯をとの思いから抜け出すことができずにいる。さらには、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と言われながら、自分のことばかりを優先してしまふ。それもこれも、本来、恵みとして与えられているこのイエス様の言葉が、場合によっては、私たちに不利益をもたらし、それゆえ、私たちの苦しみと痛みの原因となり得ると考えているからです。しかも、それは真実であり、それゆえ、間違っていない、それが私たちの心の中に

秘められた強い思いでもあるのです。だから、もしそれを人から強く求められるようなことがあると、私たちは強いストレスを感じたりもするのです。では、それがイエス様であったらどうでしょう。クリスマスを喜び楽しむ子どもたちのように、素直に心から喜び、そのイエス様のお言葉に従うことができるのでしょうか。そして、それについても私たちには確信がありません。それは、できない、できるわけがない、だからしたくもないし、誰かがやればいい、言葉にせずとも、この思いが心のどこかに必ず引っ掛かっているようにも思うのです。それゆえ、この醜い自らの姿を誰よりもよく知っているのが私たち信仰者だとも言えるのでしょうか。

ですから、そう考えるなら、ここに記されていることは単にイエス様とユダヤの人々との諍いではありません。私たち自身とイエス様との間にある溝であり、神様と人類との間にある隔たりそのものが現されているということです。ならば、クリスマスの意味はいったい何であったのか。溝を埋めるところか、イエス様を信じるその信仰は、信仰ゆえにその溝を再生産させている。今世界で起こっているあらゆる矛盾、様々な歪みを見ていくとき、クリスマスを喜ぶことなど無意味だと、そんな声が聞こえてくるようにも思うのです。そして、そうした声は、もしかしたら私たちの中でもある種の説得力をもって聞こえてくることがあるのです。では、それを打ち破るためにも私たちは神様の真実に生きなければならない、イエス様を信じなければならない、信じてイエス様を証しし、世の中を変えていかなければならない、そう強く思わなければならないのでしょうか。ならば、長く続けてきた私たちのこれまでの試みは成功したのでしょうか。もしそうでないなら、これまでやってきたことはすべて失敗だったというのでしょうか。ただ、このように考えることは私たちにとっては苦痛以外の何ものでもありません。そして、それを味わったのが、今こうしてイエス様と向き合っているユダヤの人々でもあったのです。

ただ、イエス様はいたずらに彼らを苦しめているわけではありません。彼らがイエス様とこうして向き合っているのは、神様が彼らの状態をよくご存知であったからです。御子イエス様を彼らの許にお遣わしになったのはそれゆえのことで、それは、彼らが長く、本当に長い間、救い主の到来を

待ち望んでいることをご存知であったからです。しかし、長いということは、そこにあるものすべてが純粋で汚れなきものではないということです。むしろ、長いがゆえに不誠実なものが物事を動かすようになっていったのです。それも、誠実な仮面を被り、真実を誤魔化すかのように物事は動いていく、そして、それが極まった時、それは信仰的に見れば暗黒の時代の訪れとも言えるのでしょうか。それゆえ、ある時点を過ぎれば、後戻りすることもできません。ですから、そうならないためにも、そうした状況は確実に終わりを迎えなければなりません。それも希望をもって終わることが大事なのですが、ただ、そのためには、ピンポイントでギリギリのところで行う必要があるのです。ですから、神様が御子をこの世に送るということは、まさにピンポイントの出来事であったとも言えるのですが、そのために先ず神様がなさったことは、私たちの生きる世界を、そして、そこに生きる私たちのことをつぶさにご覧になるということでもありました。神様の御心が御子イエス様によって成し遂げられたのは、神様の深い配慮あってこそそのものでもあるからです。

なのにどうして世界には悪がはびこり、益々状況は悪化していつているのか。しかも、私たちにはその手立ても知恵もないのです。しかし、御子がこの世界に送り出されたのはまさにそのような状況の中でのことでもありました。

では、世界を造り替え、この世からすべての悪を一掃するために必要なことは何なのでしょう。それがユダヤの人々を抹殺し、同時に、不信心なものを一掃することだとは、イエス様は考えません。イエス様の意に反する彼らに向かって、イエス様の仰ったことは「あなたたちが救われるために、これらのことを言うておく」というこの一言だったからです。しかし、それでも彼らはイエス様に耳を傾けることはなかったのです。イエス様が「それなのに、あなたたちは、命を得るために私のところに来ようとしなさい」とこう仰ったのはそのためです。ただし、彼らがそうであろうことは神様にもイエス様にもよくご存知のことであつたのです。このことはつまり、イエス様が私たちに求めておられることとは、そのお言葉を聞いて、私たちが何者かになることではなく、ご自分のいますところに来ること、そこに留まること、イエス様と共にあること、この事だけを望んでおられる

ということなのです。

私たちのイエス様とは、どんなお方なのでしょう。それは、喜ぶ者と共に喜び、悲しむ者と共に悲しんで下さるお方であるのです。そのどちらか一方とだけ共にいてくださる方ではないのです。だから、世界が悲惨の極みの置かれようとも、私たちはクリスマス喜び祝い、楽しむことが出来るのです。その反対に、世界がどれほど浮かれようとも、私たちは世にある悲しみをしっかりと見つめ、クリスマス祝うことが出来るのです。そして、それは、私たちが自分を誤魔化しているからではありません。敵を愛そうにも愛せないとき、迫害するものを覚えながらも、その者のために祈れないとき、そのとき、私たちは自分を偽っているわけではないからです。神様でない私たちには必ず限界があります。その時、私たちはこの自らの限界を見つめ、深き淵に立っているのです。そして、そこで私たちのなすことは祈りです。神様にすべてを委ね、任せる以外にできることはないからです。そして、私たちをこの祈りの場に招き、共にあるのがイエス様でもありませんが、それゆえ、この深き淵に立つ私たちにとって大切なことは、誰かに何かをしてあげることでもなく、また、誰かから何をしてもらうことでもありません。クリスマスの喜びというものが私たちにとってそういう喉元過ぎればというものではないように、イエス様がおられるところに私たちも共にある、それを知り、それが許されているのが、祈りをもってイエス様と共にある私たちであるからです。

ただ、それでも私たちにはそれが分からなくなってしまうことがあるのです。けれども、だからこそそのアドヴェントだとも思うのです。それは、インマヌエル、主我らと共にいますことの真実、神様と私たちとの深い溝を跳び越えて自らイエス様が近づいてくださっていることを知るこの出来事、私たちにとって、イエス様はいないのか分らないのか分からない方ではなく、共にあるお方であることを、私たちが分からなくなることがあるからこそ、神様はこのことを私たちの心に刻むために、イエス様の誕生の出来事へと私たちを毎年招かれるのです。それゆえ、御心がなることを信じ、神様にすべてを委ね、御子の誕生を心から待ち望む私たちでありたいと思います。祈りましょう。